

## 学位請求論文審査報告書

氏 名 青木 馨  
論文題目 本願寺教団展開の基礎的研究 ― 戦国期から近世へ ―  
審査委員 主査 大谷大学教授 草野 顕之  
                  博士（文学）[大谷大学]  
          副査 大谷大学教授 宮崎 健司  
                  博士（文学）[大谷大学]  
          副査 大谷大学教授 三木 彰円  
          副査 名古屋市立大学教授 吉田 一彦  
                  博士（文学）[大阪大学]

### I. 論文内容の要旨

論者は序論にて次のように述べる。すなわち、蓮如期に真宗門徒が急拡大し、名実ともに本願寺教団が形成されるに際して、その基底をなした在地道場の生成を基本的視点とし、これらの道場が近世的寺院へと成長し、教団内身分を獲得してゆく様相を考察するものである、と。文字通り、本論文は三河地域を中心とした本願寺教団の戦国期から近世への展開を、本寺本願寺の社会的身分上昇の問題と、その地域寺院や道場への展開としてとらえようとする論文である。その展開の際、身分獲得の動きと連動して、由緒書きが創成されてくるといふ、ユニークな視点を取るところに高い独自性をもつ論文であるということが出来る。

以上の目的を達成するために、以下のような論文構成をとって論を進めている（節、以下は省略する）。

#### 序 論—研究史と課題

#### 第Ⅰ編 三河における地域道場から教団への展開

##### 第一章 三河の初期真宗概観

##### 第二章 文明十六年『如光弟子帳』

##### 第三章 本宗寺の成立と展開

##### 第四章 本願寺教団の形成

##### 補 論 御文本流布の実態

#### 第Ⅱ編 本願寺門主制と近世の末寺身分

##### 第一章 本願寺門主制の性格

##### 第二章 戦国期門主とその一族—装束に見る—

##### 第三章 近世「似影」に見る住職家の成立と格付

##### 補 論 願力寺所蔵史料『余間昇進記録』

#### 第Ⅲ編 本願寺下付物と墨書名号

##### 第一章 戦国期本尊・影像

##### 第二章 墨書名号の考察

補論 墨書幼児名号について  
総論 一由緒・伝承の成立  
結語

まず序論では、研究史と課題を概説する。従来の真宗史研究の多くが、戦国期や近世といった時代区分の中で考察される傾向にあるが、こうした時代区分を克服しつつ、戦国期に成立する地方道場が、いかに近世的寺院化していくのか、その動向について注目するという本論文の目的を述べている。

第I編は「三河における地域道場から教団への展開」と題され、4つの章と1つの補論から構成されている。

第一章の「三河の初期真宗概観」では、蓮如による本願寺教団確立以前の所謂初期真宗が、三河にどのように展開するのかを概観している。三河真宗は、親鸞の柳堂布教伝承に始まるが、歴史的には『三河念仏相承日記』に見られる上洛途上の高田真仏・顕智・専海が矢作薬師寺で布教したことと、帰路、顕智が逗留して念仏勧進したことに始まるとしつつも、同書の評価に関する近時の研究を重視する。すなわち、真仏・顕智の高田門流の流れとは別の、専海一円善と続く専海系三河門流の流れとがあったという近時の説に賛同し、他にも仏光寺系も確認しうることなど、三河には諸門流の混在状況があったことを明らかにしている。

第二章の「文明十六年『如光弟子帳』」では、蓮如在世中である文明期の道場の存在形態が知られる貴重な史料である、佐々木上宮寺蔵『如光弟子帳』を分析し、さらに同寺に蔵されている『天正十九年末寺帳』への展開を検討する。ここではまず、『如光弟子帳』に載せられている地名を現代の地図に落とし、矢作川の流域や木曾川の流域などに展開していることから、如光が交易を含めた非耕作の分野に経済基盤を置いていたと推定する。さらに同帳に見られる地名に所在する寺院の本尊裏書を収集して、その多くに「佐々木上宮寺門徒」との記述が見られることを確認する。そして、同帳に見られる道場と上宮寺の関係が「手次」と表現されていること、『天正十九年末寺帳』ではそれが「末寺」とされていることから、「手次」＝法脈による師弟関係から、「末寺」＝統制組織へと変化するという門徒団組織の変質を明らかにしている。

第三章の「本宗寺の成立と展開」では、本願寺直屬坊として三河に成立した土呂本宗寺の考察を行い、それと並行して、三河を事例とした本願寺の地域教団成立の様相について考察する。特に土呂本宗寺の流れを引く三重県射和本宗寺に蔵される蓮如・如光の連座像や、近時発見された修復銘をもつ方便法身尊号の裏書の記述、さらに奈良県飯貝本善寺蔵の実孝書状等の分析から、上宮寺門徒が三重県さらには奈良県吉野へと教線を延ばしていることを明らかにする。さらに、本宗寺実円が兼帯した播磨本徳寺との関係から本宗寺の別坊が三河鷲塚に建設されたと推測して、海上交通の拠点としての鷲塚坊の役割を解明している。

第四章「本願寺教団の形成」は、上宮寺・本宗寺だけではなく、広く三河に勢力をもった針先勝鬘寺・野寺本証寺という、上宮寺を加えて三河三箇寺として君臨する寺院などの本末組織を分析して、すでに蓮如帰参時点で、これらの寺院が三河の大半の道場・門徒を掌握していたことや、蓮如の次代の実如が下付した絵像本尊の多くも、三河三箇寺を手次

としていることを明らかにする。そして、こうした寺院を地図上に落としていくと、その大半が西三河矢作川流域と沿岸部、木曾三川下流域に集中することを確認し、三箇寺ともに「川・海型」門徒を中核とする門徒集団であったと指摘する。

一方で蓮如期帰参を伝える多くの末寺由緒には、応仁2年（1468）蓮如結縁説を見るという。これは、上宮寺の如光門徒である西端恵薫（応仁寺）や光存（本證寺）に対し、同年5月20日に裏書付の墨書名号を与えたことや、如光が同年11月に没したことなどが背景となり、この応仁2年が記念的年次として記憶され、蓮如の三河巡錫伝承が醸成されたものと理解する。そして、これらの多くが蓮如伝承へと帰結するが、そうした動向を裏打ちするかのようには、三河門徒は他地域に先んじて墨書名号を授与されだした可能性を指摘している。

また、本宗寺は、三河門徒の与力化のなかに、土呂坊と海浜要害の島に創立された鷺塚坊との二坊体制となるが、そのいずれにも寺内が形成されていた。これは、実如息男実円が、播磨本徳寺との兼帯となることにより、後の大坂本願寺を中核とする海上ルートのネットワーク形成がその最大要因と考えている。英賀本徳寺は、蓮如没直前の明応7年（1498）にすでに寺号を称しているが、こうして、両寺が蓮如開基として伝承化されるものの、両寺は蓮如後の実如・円如期本願寺教団形成と位置付けるべきであるという。

第Ⅱ編は「本願寺門主制と近世の末寺身分」と題して、三つの章と一つの補論で構成される。

第一章の「本願寺門主制の性格」では、本願寺の門跡成による権威化と組織化、末寺の拡充にともなう身分上昇について、その性格と権能を家元制という視点から考察する。家元制とは近世的な職能・芸能など、広範な結集軸を中心とする集合概念であるが、蓮如による裏書記載された礼拝物下付行為は、それ自体が安置許認でもあり、すでに家元制の先駆的様相を示しているという。以来、本願寺門主は、ひとりこれを継承し拡大することになるが、あらためて相伝権・授与権・儀式執行権などの権能と重ね合わせることで、その性格は明確に家元的性格を帯びることを確認している。

第二章の「戦国期門主とその一族一装束に見る一」では、人物像である御影という絵画史料によって、先行研究ではあまり注目されたことのなかった装束や紋に焦点を当て、本願寺門主や一族、さらに近世の地方末寺住持らの教団内身分について論及する。実例として、蓮如の八男蓮芸嗣子の教行寺実誓影像（天正7年 顕如下付）を取り上げ、装束・紋について同時期の証如・顕如影像などとの比較を試みている。そしてここにも、門主に次ぐ本願寺一族の権威化の一面を見出している。

そして、そのことが近世の触頭級大坊の歴代住持の似影にも反映されていること、さらに近世後半には一般末寺にも三官の主に「余間」への動きが同様に読み取れることから、戦国期における本願寺一門・一家の権威化の動向が、近世には末寺へと展開することを提示する。これは、本願寺門主一族に擬制的に加わることを示しており、ここに、寺として住職家の確立という非形象的部分の構築が見られるという。

第三章「近世「似影」に見る住職家の成立と格付」では、これを象徴的に示している似影の五条袈裟の「紋」に注目し検討する。それは、夙に指摘されている近世初期の本堂内部の荘厳化と軌を一にするものであり、余間昇進による前門主の「職掌御影」の奉懸もこうした荘厳化の一環と考えている。

補論の「願力寺所蔵史料『余間昇進記録』」は大変興味深い史料である。ここまで述べた住職家の確立は、近世末寺の身分上昇と表裏をなすものであった。その際、大きな要素となるのが由緒書であり、安城市願力寺の『余間昇進記録』により明瞭にしている。余間昇進にともなう詳細を記した本史料は、地方末寺の昇進に対する多額な金銭上納に加え、本来の如光門徒ではなく、蓮如直弟と武家の血統を引く「家柄」を由緒に表現している。

もともとこうした寺院の由緒書は、史料的にはそれほど大きな意義付けがなされてこなかったのであるが、本願寺教団においては三官昇進の重要な要素であったことを明らかにする。また、その点に注目するとき、付随する関連法宝物も、親鸞や蓮如に直結するものが重視されることとなり、両者に仮託された意味も見えてくる。そして、あらためて下付物に注目するとき、裏書を付さない多くの墨書名号に「蓮如筆」という伝承が付随することになったと結論づけている。

第Ⅲ編は「本願寺下付物と墨書名号」と題され、二つの章と、一つの補論で構成されている。

第一章は「戦国期本尊・影像論」と題して、蓮如により確立された本尊や開山親鸞影像などの影像類の下付について注目する。そしてまず裏書の書式や意味について検討する。本願寺が下付する影像に付された裏書が、表具の裏に直接記載される事例を示して、実際はこれが原形であり、これまで言われているように、貼られた「文書」ではないことにおいてその意味を考察する。さらに、実如も蓮如のあり方を継承拡充し、絵像本尊の数は急増し、開山親鸞・前住蓮如影像や親鸞絵伝なども、制限を加えつつも、同様に大坊主を中心に下付していく。一時的には、蓮如長男順如も絵像本尊を下付しているが、いずれにしても開山影像は「真影」ではなく「御影」の語を用いており、直参寺院のみに下付されることは、顕如期までほぼ踏襲される。ただ、坐している礼盤に注目すると、蓮如初期には狭間が元来は三狭間であったものが、中途より二狭間も見られるようになり、下付先の身分差が発生した可能性を示唆する。そして親鸞御影を纏縷縁の礼盤像に固定化したのも蓮如であり、開山親鸞の権威化は、そのまま直参門末の権威化に連動していったと指摘している。

第二章は「墨書名号の考察」と題して、本願寺系寺院に多数所蔵される墨書の名号について検討する。墨書名号は由緒書や寺伝に付随して伝来する場合も多いが、普通裏書もなく、伝来は必ずしも明確とはいえない。特に、「蓮如筆」と伝える墨書名号の真偽の疑問から、ここでは墨書名号の筆跡の検討を中心課題としている。従来の真宗史研究において比較的甘い主観的判断で検討されてきたことに対し、これを客観的判断で判定できるようタイプ別に提示する。そして、タイプ別に分類した名号で、あらためて第Ⅰ編で取り上げた三河教団における、絵像本尊や御文本との比較検討を試みる。そして、六字名号が大量に授与された背景には、「御文」との一体的関係を見出し得ると指摘している。

論者が行ったこの墨書名号のタイプ分けは、斯界で一定の評価を得ており、現在の真宗文化財の調査に数多く生かされている。

補論「墨書幼児名号について」では、四歳から十二歳との年齢銘を伴う、所謂幼児名号についての考察を行う。伝存するこれらの多くは、やはり蓮如筆と考えられる傾向にあったが、諸史料との比較検討により、これも由緒書や伝承の範囲から出るものではないと結論づけている。

最後に「総論—由緒・伝承の成立」では、三河地域から抽出した多くの事例、例えば親鸞伝承や蓮如伝承、あるいは教如伝承などが生みだされた素地を探るために、第Ⅰ編では道場成立を史料の上から検討し、第Ⅱ編では戦国期本願寺の身分上昇と権威化、さらに近世における末寺の寺院化と住職家の確立を背景とする身分上昇と権威化の動向に注目したこと、さらに第Ⅲ編では、それにもなう由緒書と付随する法宝物の伝承化を前提とした本願寺下付物や墨書名号についても検討したことを述べ、最後に、その具体例を願力寺の由緒書に見だし得たことを述べる。

蓮如教団の成立以降、教団全体が多様な宗教社会あるいは通俗的社会に在って、身分上昇と権威化は不可避的現象といってよい。末寺に襲蔵される真筆の蓮如名号から、稚拙に改竄された文書類まで、全てこうした身分上昇と権威化の営為の産物と見て考察することにより、初めて学際的になると主張する。教団の裾野に展開した由緒・伝承・旧跡の成立という近世的事象を基点として、戦国期から近世への本願寺教団の形成と展開を考察したことが本書の内容であり、特色であると総括している。

## Ⅱ. 論文審査結果の要旨

審査にあたっては、まず論文全体の構成の問題が話題となった。すなわち、「総論—由緒・伝承の成立」の位置づけがわかりにくいこと、「結語」が別に準備されているのであるから、それと一体にした方がよかったのでは、という指摘があった。論者は、全体を通して見たとき、始めて「由緒・伝承の成立」というテーマが明確化したということがあり、そのために「総論」が必要になったと答えた。また、全体的に戦国期の史実を解明するという実証的な論述と、近世にそれに基づいて「由緒・伝承」が創成されるという論述が、やや曖昧のまま述べられているのではないか、との指摘もあった。

次に、特に第Ⅰ編に関しては、三河真宗の源流に関する議論で、『三河念仏相承日記』を史実と認定する議論に対し、別の専海系三河門流を想定する批判が見られるが、どう考えるのかという質問があった。論者は、専海系三河門流は荒木門流の系譜を引く高田門流ではないと考えていることを、第Ⅰ編第一章で論じていると答えた。また、末寺が矢作川や木曾川沿いに展開することから、佐々木如光を交易を含めた非耕作の分野に経済基盤を置いていたとし、その門徒団を「川・海型」門徒を中核とする門徒集団と規定する根拠との問いに、門徒分布の状況がその事を端的に表していると答えた。さらに、土呂本宗寺が鷺塚に別坊をもち、播磨の本徳寺と連絡しあっていたとするなら、交通路は紀伊半島を廻ることになるが、そういう航路は開かれていたのかとの問いには、この時期には開かれていたと明確に答えた。総じて、第Ⅰ編に関しては、三河の真宗の展開について、このレベルにまで研究を進展させたことは極めて重要な仕事であり、高く評価すべきであるという意見があった。

第Ⅱ編は、本論文の中核をなす箇所であるので、質疑も多く交わされた。まず、本願寺住職などが獲得した僧官僧位は通仏教的なものにとらえるのか、本願寺独自のものととらえるのかとの質問には、論者は本願寺独自のものと考えていると答えた。また、本願寺の三官は門跡制に根拠をもつ院家と、着座の場所に根拠をもつ内陣・余間が組み合わさっているが、それは何故かとの質問に対しては、院家・内陣・余間を自明のものと考えていたため、その問題は十分検討していないと答えた。また、近世にこうした身分上昇という気

運が高まるのは、例えば東西分派や一如期の名古屋御坊創設など、東本願寺教団のエネルギーが高まった時期があったのでは、という指摘には、そういうことは有ったとしか考えられないが、具体的には論じきれていないと答えた。さらに、補論で紹介された願力寺の余間昇官に関わる文書の発見に対しては、大変興味深い史料の発見・紹介であると高い評価がなされた。総じて、本論文全体を通しての中心的課題であり、特に第Ⅱ編第一章で論じられた、本願寺の門跡制を家元制度と見ていく考えについては、審査委員の多くから賛同する意見が出された。

第Ⅲ編は、影像と名号の問題を取り扱っているが、特に論者が始めて提起した墨書名号の分類に関して質疑が集中した。まず、A型を蓮如筆とするのは問題ないが、B型を実如筆にする根拠はという質問に対し、B型が実如筆であるという決定的な根拠はないが、A型との筆致の差違は、蓮如と同様に墨書名号を多数書いた実如以外には考えられないこと、また実如消息や実如筆正信偈文などと類似する文字が見られると答えた。次に、蓮如の名号を真似て書かれたと思われるC-5型を蓮如の長子である順如筆にする根拠はという問いに対しては、蓮如、実如、証如、顕如、教如と、様々な要素を引いていくと、順如筆以外には考えられないと答えた。このことによって、論者の提起する墨書名号の筆者の推定には、相当の蓋然性があることが確認された。論者が提起した墨書名号の分類は、既に社会的に広く認められているが、その事がさらにここで確認された意義は大きい。

以上のような質疑を通して、本論文の有効性は十分に確認された。その要点をまとめてみると、第一に、当該地域の寺院調査を精力的に数多く行い、そこで発見収集された本尊裏書や古文書をもとに、特に第Ⅰ編の各章において、三河本願寺教団の実態解明を相当程度進めたことは、何と云っても第一の業績であろう。次いで第二に、第Ⅱ編第二章第三章で取り扱った真宗の装束に関する分析は、歴史学の分野から行われた初めての研究であり、今後の真宗史研究に新たな観点を開いたものと高く評価できる。第三に、願力寺文書を発見・公開したことに基づき、第Ⅱ編補論で近世における本願寺末寺院が行った寺格上昇のための由緒・伝承創成の事実を解明したことである。それがどのような過程を経てなされたものかを具体的に明らかにしえたことは、本願寺末寺の調査において出くわすことの多い由緒書の歴史的価値に新しい視点を見出したという意味で重要である。最後に第四に、墨書の六字名号を分類して筆者の推定を行った事は、同じく本願寺末寺を調査するときに見ることの多い墨書名号の、いわばメルクマールを作ったことになり、その業績は大きなものである。既述したように、論者の名号分類は既に社会的に広く認められており、本願寺末寺院調査に度々援用されている。今回改めて質疑を通して疑問点が解消したことは大きな意義をもっている。

以上のように、本論文は細かく言えば、もう少し論述を深めて頂きたかった点や、もう少し説明を丁寧に行って欲しかった点などが散見されたが、それを補って余りある業績が認められる、好論文であると考えられる。

審査に必要とされる最終試験および語学試験については、審査委員全員により2017年12月25日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、青木馨に大谷大学博士(文学)の学位を授与する事が適当と判断した。